

発行日：2009年2月20日（隔月20日発行）通巻272号 1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報
トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

Trial & Error

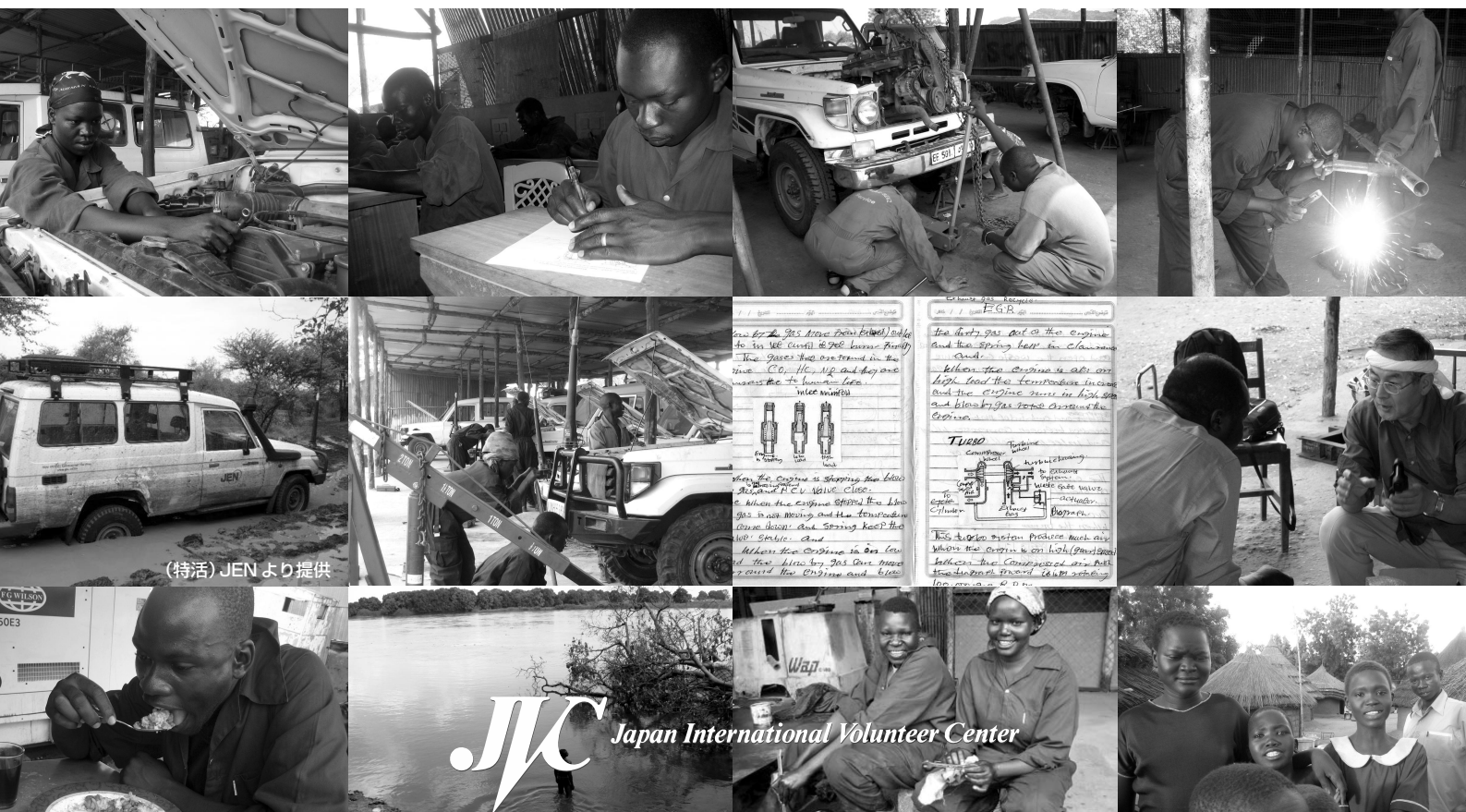
No.272
March-April 2009

特集

スーダン人 メカニックを 育てる。



＜写真：自動車整備を学んできた研修生たち＞



（特活）JENより提供

JVC

Japan International Volunteer Center

JVC がスーダンを最初に訪れたのは長かった内戦終結直後の05年3月、支援調査のためだった。その後、難民帰還支援と元難民への職業訓練による生活再建を目的としてスーダン南部の自動車整備工場に足場を置き、この12月に1年半の研修を終えた14名の自動車整備士を卒業生として送り出した。難民帰還のみならず、社会のインフラとして欠かせない自動車流通、その足元を担う卒業生たち。JVC がどのように元難民の研修生たちと向き合ってきたか、それが何を産み出したのかを現地から報告する。(編集部)

特集

スーダン人 メカニックを 育てる。

未来を自分たちの手で

内戦終結後、始まった自立への歩み

スーダン事務所現地代表 今井 高樹



■プロフィール
大学卒業後、大手スーパーマーケットに十八年間勤務。その間、ボランティアとしてJVCに関わる。退職後、〇七年五月より現職でジュバに赴任。「現地のコトバを覚えたいが覚えられないまますでに一年半が過ぎました」

■内戦は終わったが

「アフリカ最長」の二十二年間に及んだスーダン南北間の内戦は、〇五年の和平合意によってようやく終結を見た。この合意に基づき、スーダン南部は現在自治政府によって統治され、二〇一一年には北部からの分離独立の可否を問う住民投票が予定されている。

しかし、社会に残された内戦の傷跡は深い。内戦中に二百万人の命が奪われ、四百万人が自分たちの土地を追われて国内避難民となり、四十万人が国外へと逃れて難民となった。農村は荒廃し、道路、橋などの社会インフラは徹底的に破壊された。

あまりに長い内戦のため、和平合意が締結された後も、難民たちは自分の生まれ育った故郷が安全になったとは信じられなかったと言った。人々は様子を見ながら帰還を始め、内戦終結後四年を経た現在、国内避難民四百万人のうち半数の二百万人、国外に逃れた難民

四十万人のうち三十万人が帰還を果たしている。〇九年をもって大規模な難民帰還プロジェクトは終了する予定だ。

十年、二十年ぶりに故郷の村に戻った人々を待っていたのは、跡形もなく消え失せた家々、破壊された学校、木々が生い茂った畑という厳しい現実だった。国連から支給された当面の食料やわずかな農作物の種子をもとに、自分たちで家を造り、畑を開墾して生活の再建が始まった。

一方、仕事を求めて南部の中心都市ジュバに出てきた帰還民も多い。市内のあちこちに「スクオッター(不法居住地)」と呼ばれる形で草ぶきの小屋に人々がひしめくように住んでいる。しかし仕事を見つけたことは難しく、昼間から町中には職のない男性があふれている。建設ラッシュが続くジュバは復興景気に沸いているが、その恩恵にあずかっているのは外国人ビジネスマンやケニア、ウガンダからの出稼ぎ労働者である。手に職

がない、経験がないなどの理由によって当のスーダン人はすっかり取り残されている。

■難民帰還の足を支える

和平合意から一年後の〇六年、JVCはスーダン教会評議会をパートナーとして、ジュバにおいて車両整備を中心とする事業を開始した。スーダン教会評議会は七二年に自動車整備工場を開業・運営していたが、その後の内戦により工場は機能を停止。内戦終結時に設備の大半は失われていた。当初現地に派遣されたJVC車両専門家は、内戦中も工場に居残っていたスーダン人整備士と協力して最低限の設備を整え、〇六年七月までには車両整備を実施するレベルにまで工場の機能は回復した。この整備工場(以降JVC整備工場とする)を舞台としたJVCの事業は二本の柱から成る。

ひとつは、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)及び国際NGOが所有する車両の整備を通じて

※注① 世界各地にいる難民や帰還民、国内避難民などの保護と支援を行なう国連機関。

■ 事業の背景と目的

和平合意により長期の内戦が終結し、難民帰還と復興が進む南部スーダンの人々を支援する。

- 1：車両整備を通じた難民帰還・再定住事業の支援
- 2：元難民への技術研修（自動車整備士養成コース）実施による地域復興支援

■ 事業の内容

- 1：UNHCR及び地域復興のための南部スーダン政府、国際NGOの車両整備（月間80台）
- 2：研修生への整備実習と講義の実施（14名＝08年卒業、09年研修生は20名を予定）

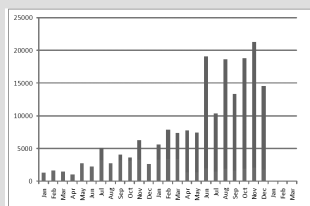
■ 事業期間

06年7月～09年12月（大規模難民帰還の終了に合わせて終了）

■ スーダン教会評議会（SCC）と工場、JVCの関係について

スーダン教会評議会は、スーダン全国にあるキリスト教派教団の連絡協議体。社会事業も行っており、この自動車整備工場もそのひとつとして72年に設立された。05年以降、JVCはその整備工場の運営を行っている。

事業終了と同時に、JVCは工場運営をスーダン教会評議会に戻すことを予定しており、そのために今から工場運営の自立に向けての努力を重ねている。



工場収入も上昇中(07、08年)。最高額は約2万スーダンポンド（＝約100万円）/月に。※注②



スーダンについて

スーダンはアフリカで最大の国土面積（日本の約7倍）を持つ国で、じつに9カ国と国境を接しており、国内の民族言語は300とも400とも言われている。大きな国土を連邦共和制をしいて維持しているが、各地方と首都圏の格差が著しく、国内にはJVCの活動する南

部だけではなく、西部ダルフル、東部地方にもそれぞれ火種が尽きない。南部のみ連邦政府と包括的和平協定を締結し、復興への道のりをたどり始めた。

南北の暫定的境界線とされている地方には原油地帯があり、「ナイル・ブレンド」と称される良質の石油が採れることで有名。この原油が、なお南北間の不信を増大させる材料となっている。

また、ナイル川流域は古来穀倉地帯といわれてきた。1980年代に米国による経済制裁によって打撃を受けたが、最近では湾岸諸国による援助により、大規模農業開発が着々と整えられていると言われている。

て、難民帰還事業を支援することである。内戦中に放置された道路はすべて未舗装、凹凸だらけという南部スーダンでは、車両にかかると負担は日本では想像できないほど大きい。しかも治安面の不安があるため、車両故障で立ち往生することがないよう、良好に整備された状態を保つ必要がある。南部スーダンでの人道支援活動にとつて、車両整備は活動の成否を左右するほど重要な要素なのである。ふたつめは、元難民の若者への職業訓練である。JVCは〇七年六月から一年半（それ以前からの研修生は二年間）の整備士養成コースを実施し、計十四名を育ててきた。研修の最大の特徴は、整備・修理のために入庫する「ナマの」車両を使った実習ができること。これによって研修生は実践的な力を身につけ、卒業時の到達レベルとして設定した「整備助手としての確かな仕事ができる」という目標は十分に達成されたと考えている。

卒業生のうち六名はそのままJVC整備工場に就職。うち一名は女性であり、おそらく南部スーダン初の女性整備士の誕生となった。工場外に就職を見出したのは南部スーダン政府に就職した一名だけ。残る七名が現在も就職活動中であるが、いずれは就職先が見つかるかと期待している。

■ 手応えあった研修

一年半の研修の中では、研修生とJVCとの間に様々な軋轢、衝突があった。彼らは様々なものを要求してきた。ボールペンの支給に始まり、クリスマス休暇に帰省するための特別手当、運転免許取得のための教習の実施など、数え上げればキリがない。人生の大半を難民として過ごしてきた彼らにとって、「要求すること」が生きていく上で必要と思われるものは受け入れられる一方、JVCにできることは断つた。クリスマス休暇の帰省のために、研修生に洗車機を一カ月間貸して、彼ら自身で洗車サービスをこなして旅費を稼ぐよう促した。彼らの初めてのビジネスはあまりうまくいかず、故郷に帰るバス代には満たなかったが、欠席も多かった。研修中に木陰で昼寝したり、サボって外出する研修生もいた。病気が親族の葬儀などやむを得ないケースも多いが、無断欠席には私たちは厳しく対処し、研修生手当も減額した。みな不満げな顔をしていた。

JVCの側にも改善すべき点が多くあったろう。しかし、たとえ不満が多かったとしても間違いないと言えることは、この一年半で研修生たちは驚くほどの力をつけた、ということだ。木陰で居眠りをしていた研修生が、今では油にまみれて見違えるような働きを見せている。焼けつく暑さやマラリアなどに悩まされながらも活動を続けてきた私たちは、彼らの成長に大きな手応えを感じている。

■ 難民帰還と、その後へ

この二年半、UNHCRを始めとして各種支援活動に携わる国連機関や国際NGOの車両整備を担当してきたJVCの活動は、南部スーダンにおける難民帰還に少なからず貢献してきた。また、内戦は終わつたが、それだけでこの国の未来が約束されたわけではない。これからの将来は自分たちで切り開かなければならない。その時に、研修生が身につけた技術と自信は大きな武器になってくれると信じている。

〇九年、工場は新たに二十名の研修生を受け入れる。そして彼らを指導するのは、日本人専門家だけでなく、いまやプロの整備士となった卒業生たちだ。〇九年末にはJVCはこの事業を終了し、工場の運営はスーダン教会評議会に委譲される予定だ。自立に向けた歩みは一步步ではあるが着実に進んでいる。その歩みをあと少しの間、支えていきたい。

※注② UNHCR以外の一般顧客からは整備料をとっており、この収入を工場運営に充てている。



■ 真剣な眼差しで講義を受ける研修生。



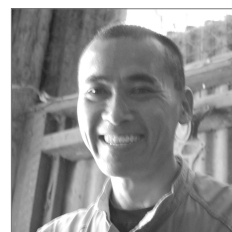
■ 実際の車両を使って整備の仕方を教える井谷（左奥）。

一年半の研修が彼らの人生を支える

自動車メカニックとして元難民の研修生と向き合った

スーダン事務所 テクニカルアドバイザー

井谷 正吾



■ プロフィール
十七年間自動車整備の現場で働いた後、青年海外協力隊でヨルダンに二回赴任。帰国後すぐにJVCに参加、〇六年から現職。スーダンに来て二年七カ月が経過し、灼熱の乾季三カ月を任期延長。

■ 十四名の研修生

最初に研修を始めたのは〇六年十一月からだったと思う。それまでに物置のようだった場所を片付け、天井・壁の補修をし、机・イスを大工に作ってもらい、研修生を元難民から募集し、すでにいた見習い五名とあわせて学科授業をスタートした。〇七年六月からはさらに研修生を追加して十五名で本格的に研修を開始した（その後一名が進学のために中途離脱）。研修は学科と実技の二本立て。学科では日本の教科書を使って教え、実技はオンザジョブトレーニング中心で、修理に入ってくる車が教材代わり。赴任してからの三カ月ほどはまったく車が入ってこない日もあり、修理する車がないのでトレーニングにならなかったが、工場の環境整備の準備にはちょうどよかった時代であった。UNHCRと車両整備契約が取れると入庫台数も増え、修理作業を教えなが

らのトレーニングが充実してきた。当初のUNHCRの入庫台数は月二十台余り、現在では月八十台以上の登録があり、毎日かわるがわる入庫している。

■ 「メカニックは車の医者」

「一年半でたった十四名の研修生？」と思われるかもしれないが、数ではなく質が重要なのだ。実際、ジュバには「道端修理工」も含めると平均が平均以下のメカニックは腐るほどいる。が、これなら日本でも通用するだろうというメカニックにはいまだお目にかかっていない（あ、サイモン工場長がいた）。我が工場にアシスタントメカニックとして残した六人は日本で通用するレベルにはまだ及ばないが、私の教えたとおりにかちんと作業し、点検すべきポイントもつかんでいる。逆に同じくらしい経験年数を持つ普通の日本人メカニックがここで同じ作業ができるかなと疑問に思うこともあ

る。日本ではありえない故障も多く、車のダメージは想像をはるかに超えるからだ。また、動かない車を教材として使っているような学校とはわけが違い、すべて生きている車が教材だ。病気・怪我をした車が入院し治療を受け元気になるって退院する。「私たちは車の高いメカニックを育てている。

学科も実技も基本からしっかりと学んでくれていれば、彼ら自身が良い指導者になりうる。アシスタントメカニックの六名はすでに二期目の研修生の先輩として技術・技能を指導してくれている。

■ 実技の量こそが質を生む

我が工場ほど忙しい職場はスーダンにはないだろう。去年、就職先開拓と市場調査のためにジュバ市内の修理屋を十件ほど見てまわった。どこものんびりしていて、車があっても日陰でお茶を飲んだり休んでいたり。車も相当長

い間預かっているようだった。

修理の腕は数をこなさなければ上達しない。今は工場の入庫台数も増え、日に平均五台以上は入る。しかもちよつとやそつとで終わる仕事ではなく、一台に丸二日かかることもある。忙しくなると私は苛立ち、サボっている研修生をしっかりとばすこともある。そつとやって修理作業の数をこなすことで技術・技能がアップし、互いに協力し合つて仕事をしていくことも覚えてゆく。一生懸命働いたものが勝つ。

■ 人は生まれ変わる

一年半の研修を指導し終わつた今でも、私たちは試行錯誤の道真ん中にいる。

元スーダン難民の青年に職業訓練指導し、就職できるように技術・技能を身につけさせるというのが目標であった。その一年半の研修が終り、修了証と就職応募のための推薦状、さらに運転免許を

これまでのあゆみ

〇六年二月	・車両専門家を派遣、工場運営の準備を開始
七月	・事業開始（UNHCRとの事業契約締結）
十一月	・研修開始（先行組向け） ・第一期研修開始（研修生を十五名に増員）
〇七年六月	（この間、一名が進学の為に離脱）
〇八年四月	・研修生のうち二名をアシスタントメカニックとして登用 ・運転免許取得の講習会を実施
十月	・就職活動開始
十二月	・卒業式 ・六名がそのまま工場就職
〇九年一月	・第二期研修開始（現在十二名、二十名を予定）
十二月	・第二期研修終了予定 ・事業終了、工場運営をスーダン教会評議会に引継ぐ予定

研修内容

■学科講義

ガソリンエンジン・キャブレター・クラッチ・マニュアルトランスミッション・トランスファー・ディファレンシャル・ブレーキ・タイヤ・ディゼルエンジン・インジェクションポンプ・始動・点火・充電・電装品について日本の教科書を使って講義。また、二十回の学科テストを実施。

■整備実習

オンザジョブトレーニングが中心。修理に入ってくる車を教材代わりに、日本人整備士が整備の仕方を教える。

取得できた者には認定書まで持たせてあげたのに、外部に就職できたのはいまだ一名だけ。

それではこの一年半はなんだったのか。皆様からの貴重な寄付は無駄だったのか。そうは思いたくない。彼らが今すぐに就職できないのはチャンスにめぐり合っていないだけだと信じたい。まったく自動車の知識がなかった素人がたった一年半（先行組は二年間）でよくここまでできるようになった、と成長ぶりに驚くこともある。過去に人手不足からシニア・メカニックを募集して実技テストをやらせてみたが、自ら「経験のあるメカニックだ」と言う彼らの腕前は、うちの研修生と大して変わらず、それ以下のメカニックも多かった。

一年半の私の指導は、間違いなく彼らを育てた。

未来の技術指導者たち

ボニー・ベティ

（卒業後、JVC整備工場に整備士として就職）



卒業

難民キャンプにいた時、おじさん（母さんの弟）が技術学校を卒業するというので式典を見に行った時に、将来はエンジニアになりたいと思うようになりました。JVCの研修に参加しようとした時、親戚のおばさんたちは「それは男がやる仕事だ。女がやるもんじゃない」と反対しました。その時におばさんたちを説得してくれたのが、さっきのおじさんだったので。車両の知識が何もなかった私は、とにかく勉強しました。卒業して就職した今は、反対していたおばさんたちも理解してくれるようになったし、「南部スーダン最初の女性整備士」と言われて、自分でも誇りに思います。将来の夢は、大学で工学を勉強して立派なエンジニアになることです。

負けん気が強く年上の男もアゴで使うほど男勝りだが、工具の管理などきちんとしてくれる。作業は確実に学科も優秀。（井合）

アバテ・パトリック

（卒業後、現在就職活動中）



卒業

研修を受けて最初に感じたのは、「これはいいぞ、本物のクルマを使って実習ができる」ということ。ウガンダの難民キャンプ時代に通った技術学校では学科の勉強ばかりだったからね。

ジュバに頼れる親戚がいなかったたので、お金に困ると知り合いのクルマを修理して稼いで凌いでいた。南部スーダンで行なわれている職業訓練では、多くの生徒が経済的な理由から途中で脱落してしまふ。JVCの研修は、腹が減ったら昼食が支給されたし、毎月の研修生手当は、金額は少なかったが生活の足しになった。ほぼ誰も脱落せずに研修を終えたのは、そういった理由があるのだと思う。今は就職活動中だけど、整備士の仕事は簡単には見つからない。もう少し時間がかかりそうだよ。

仕事、学科成績とも今一歩だったが、生真面目な性格で責任感も強い。（今井）

アルフレッド・ワニ

（卒業後、南部スーダン政府労働省に整備士兼運転手として就職）



卒業

JVCの研修は、八五％はOKで、一五％はちょっと不満という感じかな。UNHCRのクルマが中心だからどうしても同じモデルのクルマの修理ばかりだったことがひとつ。もうひとつは、スペアパーツのカatalogの見方や発注の仕方、在庫管理の仕方を教えてもらえなかったこと。一年半のコースでの限界はわかるけど、いま働いている事務所では整備士は自分だけなので、スペアパーツの在庫管理から発注まで全部やらなくてはならないんだ。もちろん研修で習ったことは役に立っているし、それがなければ今の仕事はできていないよ。でも、今の仕事で給与が二カ月間支払われていないことのほうが問題だ。給与が出ないんじゃない、家族を食わせていけないからね。

かなり生意気な態度を見せるが仕事はできる。学科成績もトップクラスだった。（今井）

オモット・オボコ

（研修中。エチオピア難民。ジュバ市内の難民キャンプで生活）



研修中

〇六年、故郷エチオピアのガンベラ地方で武力衝突が起こった。「このままでは殺される」と思いスーダンへと逃げてきて今の難民キャンプにたどりついた。食料は国連が配給してくれるけど、仕事も職業訓練の機会もなく、毎日何もすることがなかった。木陰でおしゃべりをしてても、一日中それではつらい。去年十二月に、UNHCRの職員が整備士研修の案内を持ってキャンプにやってきた。みんな飛びつくように希望者名簿に名前を書いたよ。幸いなことに自分が選考を通った。毎日一時間歩いて通るのは大変だけど、研修は楽しい。今日は、エンジンの働きについて勉強したんだ。研修を終えたら、家族がいるガンベラに戻って整備士になるつもりだ。

長身揃いの二期生でもひときり長身。英語は苦手だが、講義になんとかついてきている。（井合）

現地の関係者にお話を聞きました。

JVC 整備工場は、現地で活動する NGO にとっては自動車修理屋さん、UNHCR やもとの工場スタッフ、スーダン教会評議会からすれば事業パートナー。それぞれから一言ずつ。



JEN
山田絵美さん



UNHCR
吉田典古さん



JVC 整備工場
サイモンさん



JVC 整備工場
フォエベさん



スーダン教会評議会
レッチャさん

信頼できる整備工場です

現地で活動する日本の NGO JEN
スーダン・ジュバ事務所長

山田絵美さん

JEN は南部スーダンのテレケ力郡、ラニヤ郡で、衛生教育、井戸掘り、トイレ設置などの人道支援活動を行なっています。私たちのポリシーは、支援が届きにくい地域の人々を支援すること。必然的に、事業地は道なき道を走ってたどり着くようなアクセスの悪い村々になります。テレケ力郡は雨季には道路が冠水し、湖の中を走るような感覚です。ラニヤ郡はガタガタの悪路。しかも、活動に遅れが出ないようにと無理に走らせるので、どうしても車両に大きな負担がかかります。

でも、そんなことができるのは JVC 整備工場があるからこそ。ほかにも整備工場はありますが、信用できるかちょっと不安です。別の事業地でのことですが、車両を整備に出すと新しい部品が古い部品に付け替えられて戻ってくるという話を聞きました。その点、JVC 工場は信頼できます。整備士の皆さんには「お願いだから水の中は走らないでください。クルマが壊れてしまいます」と叱られています（笑）

スーダン人技術者の「重み」

UNHCR
南部スーダン事務所代表

吉田典古さん

研修生の卒業式に出席しましたが、とても印象深いものでした。みんな嬉しそうでした。南部スーダンではエンジニアが本当に不足していて、先日教育省を訪問した時に、発電機が故障したが技術者がいないので修理できず、職員が「オフィスが暑すぎる」と言って出勤しないという話を聞きました。建物を作ってもそれを維持できる人材がいなければ機能しません。その意味で、人材育成は道路や学校の建設とは違った重要性を持っています。

しかも、JVC の研修生たちは元難民。UNHCR から見て意味が大きいプロジェクトです。学校にきちんと通う環境になかった彼らは、職業訓練でも簡単にドロップアウトします。だから、ほとんど脱落者なしに長期の研修を終えたのは本当にすごい。「たった十人」でも、日本の整備士一人と南部スーダンの一人とでは重みが違います。南部スーダンの復興には多くの課題がありますが、卒業式での研修生の表情には、未来に向けた小さな芽を感じました。

この国の将来を担うために

JVC 整備工場 工場長

サイモンさん

瀕死の状態だった工場が、JVC が来て変わった。改修工事、機材や工具の補充、そして新規顧客開拓。工場収入も増え、スペアパーツを購入して在庫を持てるようになった。私たち工場スタッフは、整備士から会計担当に至るまで、もちろん研修生も、誰もが忙しく生産的に仕事をしなくてはならない。手が空いたら、となりの誰かの仕事を手伝わなくてはいけない。木陰で休んでいるだけの人間は必要ない。そうでなければ、整備工場は存続できない。

正直言って、スーダン人は働き方を知らない。人の仕事は手伝わないし、工場の草刈りや掃除はすぐにサボリたがる。ケニア人、ウガンダ人にはそれができる。スーダン人はもっと学ばなくては、スーダンの将来はない。今まで工場スタッフの件費は JVC から支給されていたが、今年から、半分は工場収入から拠出することになっている。でも、何も驚くことではない。いずれ自立しなければいけないことは、みんなわかっているはずだ。

工場も私も大きく変わった

JVC 整備工場 総務担当

フォエベさん

スーダン教会評議会に二十五年間勤めてきましたが、JVC が来てからの二年半で工場も私自身も大きく変わりました。内戦中にはスペアパーツもなく仕事ができませんでした。今では工場は見違えるようになり、様々なお客さんがクルマを持って来てくれます。JVC がいなくなった後も、たくさんのお客さんが整備することができると思います。

私自身のことでは、以前はコンピューターなんて触ったこともなかったけれど、パソコンの使い方を習い、Eメールの送り方も覚えしました。お客さんへの見積りや請求書は私がパソコンで作っているんですよ。給与が定期的に支給されるようになったので、去年土地を借りて家を建てました。孫たちに英語教育を受けさせるため私立の学校に入れたのですが、その学費も払えそうです。

JVC にひとつ注文があります。現地代表が私にパソコンを教えてくれる時に、マウスの動きが速くて全然ついていきません。なんとかならないでしょうか。



■スーダンでの日本の支援事例として日本からの見学者も多い。写真は中山外務大臣政務官。



■新しい研修生に作業のやり方を見せる卒業生マリッシュ（左端）。



■晴れの卒業式で、UNHCR 南部スーダン吉田代表から卒業証書を受け取る卒業生ポニー。

卒業生の活躍を祈る！

スーダン教会評議会

エクトリア事務所長

レッチャさん

○六年にJVCから「パートナー」として車両整備事業をした」という話があった時、これは大きなチャンスだと思いました。町を走っているのは日本車ばかりだし、日本人整備士がジユバに来て私たちの工場の整備士をトレーニングしてくれること、日本人がいることで多くの人が整備工場にクルマを持ち込んでくれるだろうと期待しました。また、JVCがUNHCRの車両整備を手掛けようとしていることにも驚きました。なぜなら、第一次内戦の直後に私たちが整備工場を設立した当時も、難民帰還のためのUNHCR車両を整備していたのです。まさに「歴史は繰り返す」です。

その後、JVCは工場の改修工事を実施し、スペアパーツの在庫を拡充して多くの車両を受け入れ、そして次の世代の研修生を育ててきました。卒業式には私も出席して、彼らに言いました。「JVCやスーダン教会評議会の評判が今後上がるか、それとも下がるかは、社会に出て行く君たちのからの活躍次第だよ」と。

日本とスーダン、身近ではるかな距離。

石油、自衛隊派遣をどう考えるか

スーダン事業担当 佐伯 美苗



読者諸兄姉には、日本からは物理的・物理的に遠大な距離の向こうにあるスーダンについて、日本と密接な関係があると言われても、ピンとこない方も大勢おられるだろう。しかし、スーダンと日本は、われわれ自身が意識しないうちに距離を縮めている。

まず、われわれが生活の基盤を置く石油。近年スーダン産の原油購入額は、中国と日本が首位争いを続けている。○六年、関西電力と九州電力は今後スーダン産の原油を使わないことを発表した。ダルフルで無辜の民間人に対して使われる武器の購入資金となっている、と人権団体から指摘を受けたためであった。しかし他の電力会社はこれに対応しておらず、ゆえに首都東京はスーダンの悲慘に胡坐をかいて快適な生活を維持している、と言つこともできるのだ。逆にこの購入額の高さのために、日本はスーダンの今後に大きな役割を果たせる可能性があり、その義理がある。

そして、スーダンは日本政府による「国際貢献」の重点地域でもある。自衛隊の「部隊派遣」候補地として取りざたされてきたが、○八年十月、南北スーダンの停戦監視のために設置された国連スーダンミッション（UNMISS）司令部への「自衛官派遣」が

実現された。これが、部隊派遣への布石でないと断言はできない。

「インフラの整わない地域であるなら、道路や橋の補修、地雷の除去に自衛隊派遣は有効なのではないか？」と考える方もおられるだろう。しかし、そもそも「自衛隊派遣」は、長期的に地域の生活改善に貢献するとするNGOや国際機関がもつ視点とは異なり、日本国内の政治的駆け引きの材料として議論されてきた。そして、自衛隊は人道支援のプロフェッショナルでもなければ当地の事情に明るくもない。だからこそ「慣れぬ外国で艱難に耐えて任務をまっとうする」といった感傷的な評価が喧伝されてきたわけだが、莫大な国家予算を使う軍事組織よりは国連やNGOのほうが効果的かつ効率的と断言できる。政府によるスーダン支援策を吟味するのなら、自衛隊派遣先にあきではなく、それ以外の組織による民生支援や現地警察機構の再編、SPLA（現南部スーダン自治政府軍）の合理化といった、国際的にも需要が高いとされている分野への関わりも含めて議論されるべきであろう。

生活を支える原油を供給する地域の平和構築に対して、日本はどこに立ち位置を見出すのか、という根本的な課題を、われわれ自身が考える必要は多いにある。

2008 年末からのパレスチナ・ガザ地区への侵攻に関する報告

この年末年始を落ち着かない気持ちで過ごした方も多かったのではないだろうか。12月27日から始まったイスラエル軍のパレスチナ・ガザ地区への軍事侵攻は、民間人に多くの被害者を出した後に1月18日に停戦した。国連施設を破壊し、人道支援物資さえ遮断する非情な政策に対して、私たちはどうすればいいのだろうか。JVCの考えと現地ガザからの声をお届けする。(編集部)

イスラエルによる「ガザ占領」とは

エルサレム事務所 現地代表

小林 和香子



■ 殺戮と破壊の軍事侵攻

今回のイスラエル軍によるガザ地区への軍事侵攻は、千三百人以上の犠牲者と五千人以上の負傷者を出しました。国連はその半分以上は女性と子どもとし、ガザの人権団体は八五%が民間人だとしています。家を破壊され、あるいは退去命令によって避難した先の学校やモスクすらも攻撃されました。逃げる場所のない恐怖のなかで、人々は命をかけてパンを買い、水を汲みに行き、電気も燃料も水もない中で真冬に暖を取ることもできず、夜通し続く爆撃に家族や親戚と身を寄せあつて、ただただ悪夢が過ぎるのを待つような状態におかれました。

攻撃の最中にガザから届いたメッセージは、「パレスチナの人々は平和的な人々だということを知ってほしい。私たちは平和に暮らしたい。子どもたちを健康に育てたい。それだけを望んでいる」という悲痛な叫びでした。このような無辜の市民を傷つけ恐怖に落とし入れる軍事侵攻はいかなる理由をもってしても許しがたいものです。

■ 占領下で「人としての尊厳」を奪われてきた難民たち

六七年からイスラエルに軍事占領されているガザ。そこに住む人々の多くは安価な労働力としてイスラエ

ルで働いてきましたが、二〇〇〇年の第二次インティファダ以降はそれも許されなくなりました。失業と貧困が深まっていく中、すでに二〇二年にはガザの子どもたちの栄養状態に対して国際社会から警鐘がならされていきました。

○五年のイスラエル軍のガザからの撤退後も、ガザに通じる陸・海・空すべてのルートの人・物・金の出入りはイスラエルが管理し続けました。○六年にハマスが評議会選挙に勝利した後にガザの閉鎖は強まり、イスラエルへの輸出に細々と頼っていたガザの脆弱な経済は壊滅しました。さらに○七年六月、ガザに決定的な「封鎖」が敷かれ、最低限の人道物資以外の物資搬入が禁止されました。通学や通勤のための車のガソリンや調理ガス、教科書を印刷する紙も不足する有様です。このように、ガザの人々は長い間開発を否定された上に、生活の糧を奪われ、経済の七割以上を支援に依存せざるをえず、あらゆる人権を侵害され「人としての尊厳」さえも奪われてきたのです。

イスラエルとハマスが昨年六月に結んだタハディーヤ(一時停戦)は、ガザからのロケット攻撃をほぼ抑えたものの、イスラエル側への条件だった「封鎖」解除は実施されませ

■ 「封鎖」の解除が必須

一月十八日、お互いが一方的に停戦を発表しました。双方の暴力の停止は一時的であつても歓迎します。人工的に作られた人道危機に直面しているガザの人々に一刻も早く人道支援物資を届け、彼らの傷ついた身体と心を癒す必要があります。

しかし、それだけでは十分ではありません。一日も早く瓦礫と化したガザの復興と開発発展を支え、ガザの人々の失われた「人としての尊厳」を回復する必要があります。そのため、自由に人や物資がガザを出入りできるよう、「封鎖」が解かれることが絶対条件なのです。

12 月末からの JVC の動き

- 12/30 関連情報をウェブサイトで公開、現地からの情報も提供開始
他団体と共同でイスラエル大使館前抗議行動を開催
→外務大臣及び駐日イスラエル大使宛に攻撃停止の要請書を提出
- 12/31 第1次緊急医療支援を決定
- 1/10 ピースパレード&シンポジウム開催
- 1/13 第2次緊急医療支援を決定
- 1/15 緊急報告会開催 @ 東京
- 1/24 緊急シンポジウム @ 宇都宮
- 1/25 関連イベントで最新情報を報告
- 1/26 小林・福田がガザ入り、支援物資を持参
- 2/20 活動報告会 @ 大阪 (予定)
- 2/21 活動報告会 @ 名古屋 (予定)



■ 1/10のピースパレードの様子。

スタッフのひとりごと

大きな声で思いをアピール！

アフガニスタン事業担当補佐 谷山 由子

こどもの頃、4人姉妹の末っ子の私は大声で叫ぶことが存在をアピールする大切な手段でした。最近、過去に鍛えたこのパフォーマンスを発揮できる機会が巡ってきました。

昨年の秋、ある集会でキャンプ座間(米軍基地)のバストップで毎週水曜日に座り込みをしている女性たちがいることを知り、さっそく出かけて行ったのが始まりです。そもそもアフガニスタンにいた頃から米軍の存在への疑問が増幅し、日本にもどってから「あなたたちのやっているこ

とはおかしい」と伝えたかったのですが、さすがに一人で訴える度胸はありません。そこで、第一歩としてこのグループの毎月の定例抗議デモ行進に参加することにしましたのです。
“Stop the war right now (今すぐ戦争をやめろ)!”、“No UEX in Camp Zama (キャンプ座間に新司令部はいらない)!”と昼過ぎから大きな声でアピールします。続けているうちに(自分は黙っていないぞ)と勇気が湧き、深みにはまっていく気配を感じつつあります。思いのたけを



イラスト／かじの倫子

叫び尽くした頃には陽も傾き、地元の有志とお疲れさん会に。「デモの許可がとりにくくなってねえ」とか「ビルの一隅で米軍監視をしてたら逮捕されちゃってさあ」と普段耳にしない武勇談も飛び交って、ちょっと緊張しつつも大声をあげた後の達成感に酔いしれるのでした。

映画『シリアの花嫁』

みるよむきく

監督：エラン・リクリス／イスラエル・仏・独合作／97分



シリアの男と結婚する花嫁モナは、一度軍事境界線を越えると、現状では二度と故郷に戻れなくなる。親族や友人らと心から喜びを分かち合い、最高のひとときであるはずの婚礼、それが「永遠の」別れとなる。『シリアの花嫁』は、なんとも皮肉な現実を突きつける。二〇〇九年はイスラエル軍によるパレスチナ自治区ガザの大規模爆撃と共に幕を開けた。犠牲者千三百人、子どもの死者も数百を超えたという。そのガザのはるか東方、シリアに接した「ラン高原の村」がこの『シリアの花嫁』の舞台だ。マジダルシャムス、その村は六七年の第三次中東戦争でイスラエルが占領してから四十余年、シリア側と離れ離れの家族が「叫びの丘」で安否を気遣う。

花嫁のモナは五人きょうだい。シリア支持を熱烈に訴え権力に屈しない父、ロシアと欧州に暮らす二人の兄、自らの生きがいを探索する姉、そしてシリアに暮らす弟はそれぞれの人生を歩んでいる。歴史と政治に翻弄されたその生き様もこの映画をより深いものになっている。

停戦ラインを挟んで初めて顔を合わせる新郎新婦。その「壁」を越えられるのかどうか、ぜひスクリーンで確認してほしい。

私は九二年の一月、湾岸戦争からちょうど一年後に、イスラエルと西岸を訪ねた。今でも思い出すのは、イラクのスカッドミサイル攻撃を受けたテルアビブで、うず高い鉄板に囲まれた区域がいくつもあったことだ。外壁には明るい絵が描かれていた。壁の向こうはミサイルが空けた穴。人々の目をそらすための壁だ。そして、今、パレスチナ自治区とを隔てる「二十一世紀のアバルトヘイト」六メートルの壁。そして、映画の舞台の村の四十年にわたる境界線…。

いつまで憎しみ合い、お互いを隔てるのだろうか。私たち日本人がまずできることは、中東で起きていることに関心を持ち続けることだ。明日への希望につながるはずの結婚が別離を生む場所など、この世界にあつていいはずがない。ぜひご覧いただきたい。

(長野・会員S、四十五歳)

JVCは、現在10の国／地域で活動しています。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善(CLEAN)

07年からシェムリアップ県東部の35村で活動活動地では米の収穫がほぼ終了した。雨不足のため田植えの時期が遅れたため、一部で収穫量が例年より低かった。現在は、野菜栽培、養鶏などの研修を村で実施している。

■持続的農業と農村開発(SARD)

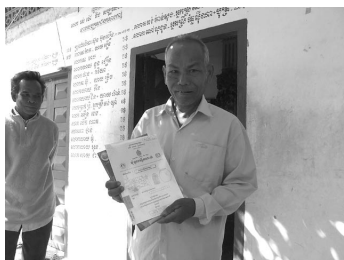
安全な水や食糧確保をめざし、94年からカンダール県50村で活動している。昨年の持続的農業と農村開発の評価に続いて、1月に環境教育の最終評価を実施した。これをもって、SARDプロジェクトは3月末で終了する予定。

■資料・情報センター(TRC)

持続的農業などに関する資料を94年から提供している。プノンペン事務所とともにTRCも新しい事務所に移転した。また、コミュニティ資料センター(CRC)の活動評価を実施し、今後は、既存の図書室などを中心に支援することを確認した。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を開始した。7月の新工場への移転後、修理工場の顧客が半減。今後はサービスの向上や営業活動に力を入れ、工場の収入の安定を目指す。(以上山崎)

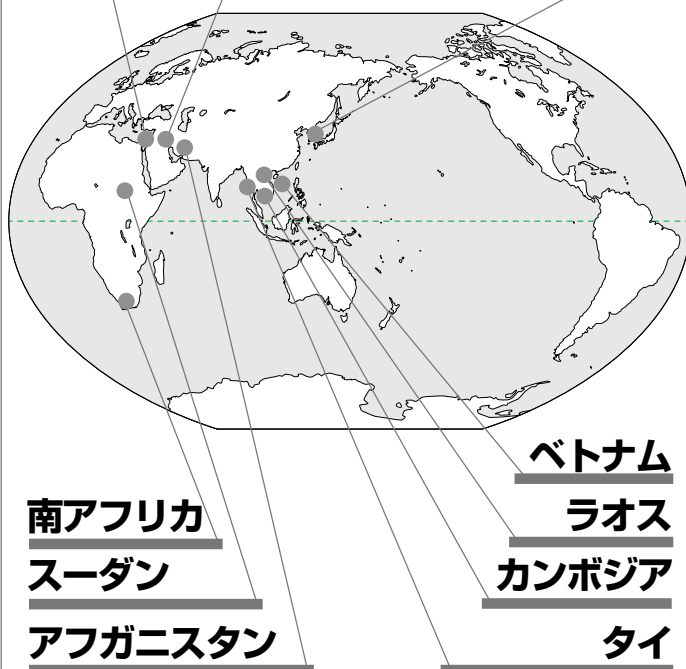


■CRCで借りた本を読んで漬物づくりに挑戦する村人。

イラク

パレスチナ

コリア



南アフリカ

スーダン

アフガニスタン

ベトナム

ラオス

カンボジア

タイ

ラオス

■森林保全／農業・生活改善事業(カムアン県)

12月にカムアン事業のフォローアップでカムアン県に出張。幼苗一本植(SRI)については、実践者の多くで通常以上の収穫があがったこと、そして積極的に自分で工夫する村人が育っていることを確認。コメ銀行については規則と将来の返却について確認、井戸についてはまだ完成していなかった2村と話し合いを持ち、返却期限を設定した。

■森林保全／生活改善事業(サワナケート県)

新規事業の正式な認可がラオス行政から下りるのを待つ中、トレーニングに参加した。カンボジアのラタナキリ県で活動するNGOを訪問し、同地における紛争解決などについて学んだ。また、ラオス南部チャンパサック県で活動するNGOが開催した法律トレーニングにオブザーバー参加。村に法律ボランティアを育成し、法律という観点から村の土地や森林を守ろうという新しい試みであり、今後もフォローする必要があるだろう。

1月に新規事業がラオス行政から認可され、県行政との間の事業覚書調印式も執り行なわれた(以上平野)



■事業覚書調印式で記念撮影。いよいよ新規事業が始まる。

タイ

■農村派遣研修

タイの農村に滞在し「開発」について村人と考え・学ぶ研修プログラムを実施。現在派遣されている研修生は、11月の中間報告会を終えてそれぞれ元の派遣先に戻った。12月に入り、これまで滞在していた農家を離れ、同じ地域の別の農家に滞在することにした。研修生の一人は、共同農園のある村に滞在した。共同農園に集う村人が楽しんで農作業をするだけでなく、共同農園という場所がお互いの情報交換や交流の場にもなっていることを学んだ。1月からは有機農業の普及を進めるタイのNGOが活動する地域に派遣した。研修生は、NGOの活動が実施されている農家に滞在しながら、1ヵ月間NGOスタッフの活動に帯同し、NGO側の視点を学んでいく予定。(下田)



■NGOが活動する農家にお世話になる研修生の金森君と受入農家。

イラク

■国内避難民支援

現地の団体と協力し、収入が無いなど特に困難な状況にある避難家族を対象に食料支援を行なっている。この間、09年1月の配布に向け協議を重ねた。食料キット（米、豆、砂糖、食用油）をアンバール県ファルージャ市の450家族に配布する方向で準備中。

■白血病児への医薬支援

不足している医薬品をJIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク。JVCもメンバーとして参加）として4つの病院に提供している。イラクの子どもが描いた絵のパッケージのチョコレートによる資金調達キャンペーンを実施。JVCも企業のバザーに出展するなどして参加。

■アドボカシー

航空自衛隊のイラク撤退に伴い、日本のイラクへの関わり方を問うシンポジウム『イラク戦争は何をもたらしたのか』を12月7日に開催。弁護士、ジャーナリスト、NGOがそれぞれの経験を報告するとともに、今後の国際社会のあり方を提言した。約70名が参加。（以上原、谷山）



■様々な分野のパネリストがイラク戦争と日本の関係について議論。

ベトナム

■農村開発

ホアビン省における住民参加型農村開発事業は09年3月で終了するため、09年1月に評価会合を3つの村とタンラック郡で開催した。タンラック郡では農業農村開発省、ホアビン省の行政スタッフ、対象村以外の村や郡の代表など132名が参加した。JVCの活動が住民同士の学びあいを促進し、生計向上に役立っていることが高く評価された。また、村人からはJVCが紹介した稲作の改善によって稲が増収したことや、等高線農業の実践によって土壌流出が軽減されたこと、家庭菜園の改善により多くの食料が得られるようになったことなどが成果として挙げられた。

■ネットワーク

ホアビン省においてアヒル水稻同時作を実践する村人の数が増加しており、行政もJVCの事業対象地域以外にこの農法を紹介していきたいと考えている。そのため、2月23日から27日までフィリピン・セブ島で行われる第6回アジア合鴨農法シンポジウムに対象地域の村人とホアビン省の行政スタッフとともに参加し、他国の農家から経験を学ぶ予定である。（以上伊能）



■タンラック郡の評価会合でJVCスタッフが報告をした。

スーダン

■車両整備を通じた難民帰還支援

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）との事業提携契約に基づき、「車両整備による難民帰還支援事業」と、元難民の若者を対象にした「整備士研修による帰還民定着支援事業」の2本柱による活動を実施している。

12月、1年半（一部の研修生は2年）の研修を終えて14名の第1期研修生が卒業式を迎えた。途中で大学に進学した1名を除けば脱落者もなく全員が長期の研修を終えたことに、来賓から驚きの声もあった。卒業後の進路は、6名はそのままJVC整備工場に正規採用され、1名が南部スーダン政府の整備士兼ドライバーとして就職。他の7名は就職活動中である。

他方、第2期生12名の研修が1月10日から始まった。第1期と同じく大半の研修生が元難民であるほか、2名の女性、難民キャンプで生活する2名のエチオピア難民を受け入れている。研修生は工場の各整備士と一緒に作業をしながら技術指導を受けており、第1期の卒業生たちも「教える側」にまわって後輩の指導にあたっている。第2期研修期間は09年12月まで。研修生は今後の補充で20名にする予定。（本誌特集参照）（今井）



■晴れの舞台上、卒業生代表スピーチをするジョセフィン。

南アフリカ

■HIV/エイズ（リンボボ州）

在宅介護ケアボランティアに対するHIVエイズの治療とケアについての研修に25名が参加した。また、以前研修を受講した陽性者の方々に対しても、フォローアップとして2度目の研修を12月に実施した。以前に学んだ知識の定着と振り返りを通じて、日々の暮らしに役立ててもらおうというもの。青少年に対しては、HIVエイズをテーマとした演劇を練習することで、HIVについて啓発することをめざして、演劇の研修を開始した。09年3月まで実施する予定。（水寄）

■環境保全型農業（東ケープ州）

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。7ヵ月以上雨が降っていなかったが、11月中旬にやっと雨が降り、主食のトウモロコシの種を植えることができた。JVC活動地では、化学肥料から牛糞を使った堆肥に転換する農家が増えている。ローマ村では90%が牛糞堆肥による有機農業に転換した。「土壌がよくなり、収穫が増えた」と村人は言う。化学肥料は1年で2.2倍値上がりしており、地元の資源を活用できる牛糞堆肥は経済的でもある。（津山）



■研修を修了した在宅介護ボランティアの方々。

パレスチナ

■ガザ緊急支援

12月末からのイスラエルによるガザへの攻撃によりガザで多くの死傷者が出ている状況を受け、地元医療 NGO を通した救急キットの支援、また治療用ミルクが必要な子どもたちへの特別ミルクなどの支援を開始。(本誌 8、9 ページ参照)

■健康教育・巡回診療支援

エルサレムの医療 NGO による保健教育・巡回診療活動。エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などでの活動を行なった。幼稚園や地域センターなどから新規のリクエストも増えている。

■幼稚園児栄養改善支援(ガザ)

ガザの幼稚園児約320名への栄養改善支援。西岸ヘブロン産牛乳とラマッラー産ビスケットを配布中。ハンユニスの栄養センターで栄養失調児への治療用栄養食を提供。12月末からはガザ内の状況の悪化に伴い幼稚園、栄養センターは活動を停止。

■収入創出支援

ベツレヘムの難民キャンプ内のハンダラ文化センター女性グループの刺繍プロジェクトを支援。新たな販売先を得るために、12月には現地を訪問している外国人たちに向けてのプレゼンテーションと販売会を実施。(以上福田)

■アドボカシー／平和創造・平和構築

今回のガザ攻撃中の12月30日、停戦を求める要請文を NGO など12団体の共同でイスラエル大使と中曽根外務大臣に提出。1月10日にはピースパレード『ガザに光を!』を実施し目標を超える1500人が参加した。(小林)



■治療用ミルクを受け取りに来た父親(右)。

アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善のための地域保健事業

地域保健員と協力して村の女性対象の母親教室を開始。初回は各村15名合計135名(1地域は次月に開始を延期)

の女性が参加。今後月1回のペースで実施していく。診療所では診療所周囲の塀建設がほぼ終了し12月中旬から待合室や健康教育、スタッフ控室用の棟の建設が開始された。診療所活動を補足するため開設が待たれていた遠隔地のサブセンターは、1月中には診療を開始できる見通し。

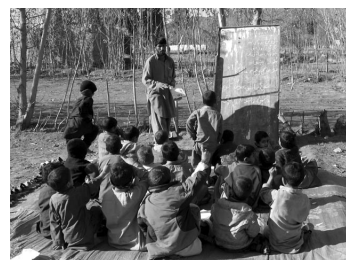
■教育支援活動

12月下旬、昨年度に引き続きシェワ郡内の全小学校低学年の教師を対象に教科書指導法(小学校3年生向け)に関する研修を実施するため事前調査を行なった。その結果、昨年より教師数が増えたことがわかり、研修対象者の枠を増やす予定。

■政策提言・ネットワーク

【日本】11月29日アフガニスタンから現地 NGO の協議体代表と調査提言をリードしている国際 NGO の代表を招き現地状況の共有と日本の役割を考えるシンポジウムを開催した。

【現地】11月半ば、PRT とアフガン警察が診療所を選挙人登録会場に使うという情報が入った。治安上危険なため郡や長老と話し合い村の他の場所を使用することになった。(以上長谷部)



■多くの教師が教室も教材もない中で授業に取り組む。

調査研究・政策提言

■新 JICA 環境社会ガイドライン有識者委員会

第19回～21回の有識者委員会が開催され、高橋が委員として参加。これまで旧ガイドラインの内容とその運用実績をレビューしながら、論点の抽出、新ガイドラインへの提言などを議論してきたが、一通り論じ終えたので委員会として中間報告書を作成(その後、報告書は原科委員長より緒方理事長に提出)。

■中東パブリックフォーラム

シンポジウム『イラク戦争は何をもたらしたのか』を行なった(12月7日、明治大学)。自衛隊派遣から5年目の節目に、JVC の現場からの報告も踏まえながら、メディア、弁護士、NGO 関係者をパネリストに迎え、イラク戦争を様々な視点から総括した。アメリカ大統領の交代を期に、国際社会の関心はアフガニスタンに移っていくことが予想されるが、イラクではまだまだ問題は山積みであり、またイラク戦争のきちんとした検証が行われていないことが確認された。(以上高橋)

コリア

■絵画交流(国内巡回展)

引き続き『南北コリアと日本のともだち展』の国内巡回展を開催している。各地の協力者のおかげで、12月には愛媛の松山および埼玉の浦和、そして朝鮮学校の学生美術展においても『ともだち展』の取り組みが紹介された。

愛媛県美術館別館の萬翠荘にて12月上旬に行なわれた松山展では200点あまりが展示された。毎年、県内の子どもたちの絵も展示しているが、「四国で唯一松山にある朝鮮学校は参加してくれるが、日本の小学校に出品をお願いしても応えてもらいにくくなった」とのことで、日朝関係の厳しさが垣間見えた。

今年で6回目となるさいたま展は、さいたま市民活動サポートセンターにて開催された。3日間の期間中、韓国の仮面作り、洋琴(ヤングム)演奏、日韓の絵本紹介や折り紙など多彩な企画が行なわれ、幅広い層が『ともだち展』に接して朝鮮半島に関心を持つ良い機会となっている。(寺西)



■さいたま展会場で披露された朝鮮半島の楽器・洋琴の演奏。

JVC 国際協力コンサート 2008

東京20周年 & 大阪15周年、 ともに盛会でした。



2008年は、大阪15周年、東京20周年を迎える記念の年でした。東京公演ではコンサート実行委員会が「19年を振り返るパネル展示」と「ミニコンサート」を開催し、好評をいただきました。来場者は大阪公演704人、東京公演1,683人となりました。

ノルウェーから招いた指揮者ハウゲ氏は、「広島は自分の目で見
るべき場所」と、大阪滞在中に広島を訪問し、おつれあい合唱団
の前で「Singing together is to make a peace」と挨拶され
ました。出演者の皆さんの国際協力に対する理解、JVCの活動へ
の関心が高く、記念公演にふさわしいメンバーで演奏できたことに
感謝しています。

また、この20年間、公演開催のために奔走し、支えてくださっ
た歴代のJVCコンサート実行委員会の皆様に、この場を借りて心
より感謝申し上げます。初回の公演より実行委員会に参加し、80
歳を越えられてもなお、八面六臂の活躍をされている五味さんにご
寄稿いただきました。（コンサート事務局 石川 朋子）



■ 東京公演の様子。

国内ひろば

JVC network

来場者アンケートから

- ・ 毎日暗いニュースが多い中、このような美しい音楽が聴ける
ことへの感謝を感じます。
- ・ 合唱団員の公募は素晴らしい企画です。誰でもボランティア
として参加できる機会が与えられてよいきっかけになります。

20年の歩みの中で

JVC コンサート実行委員会 五味 澄子



既に21年前の初夏のことだったろうか。
友人から、アメリカの方がボランティアを
探しておいでになるから行ってあげてと言
われ、そのバスカビル夫人のお宅を訪ねて、
彼女の計画を伺ったのである。要は、その年
末に昭和女子大の人見記念講堂において
「メサイア」を公演し、収益をJVCに寄付し、
現地の活動を支援しようというものであっ
た。たまたまその3年前、私は母校のイベントでその講堂の迷路
のような楽屋に泣かされた記憶があったので、迷わず楽屋担当を
申し出て、そのまま今日では楽屋を闊歩するまでに至っている。
演奏会当日の指揮者とソリストの楽屋における食事やステージへ
の出入りの合図といった世話係を担当し、東京公演20年、大阪
公演15年を経過した。10年ほど前、プログラムにミスが多いの
が気になって、バスカビルさんに尋ねて以来、プログラムの校正
も任されるようになった。

印象に残っている人は、やはり8年も連続でテナーを歌ったバ
リーさん、築地のすし屋がお気に入りの指揮者リンクさんであ

る。バリーさんは、今でも毎年来日され、よく連絡をくれ
る。リンクさんお薦めの「あぶりトロ」を実行委員のメン
バーで食べにいったこともある。指揮者夫人が持参の楽器
を地下鉄に置き忘れ、皆であわてて探したこと、大阪で支
払うべき経費を用意し忘れて寒空のもと金策に走り回った
こともあった。ふり返れば、よい思い出よりも驚くことの
の方が多かった年月ではあったが、今日まですべて無事に終
わり、ただただ感謝の一語に尽きる。

東京では、5年前までお世話になっていた郡司先生指揮
の合唱団から独立した当初は、練習室からもれてくる歌声
にドキッとすることもあったが、それもいつしか古い話と
なり、昨年の来聴者からは合唱がきれいになったと褒めて
いただき、英語もドイツ語も立派？にこなせるまでに至っ
たのは、団員の熱意もさることながら、合唱指揮の青木洋
也先生、杉山範雄先生及び、全体をまとめる柴大元氏等の
細かい気配りによるところが大きいと思う。

公演上、改善すべき点が多いと思われるが、今後何十年
経っても、JVCが働くアジア、中東、アフリカ地域の困難
な生活を強いられている人々が、今日よりは心地よい明日
にめぐり合えるように、ささやかな協力でも続けたいと
思っている。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税の優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先
をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務局

11 月計 **513,603 円**

12 月計 **2,082,000 円**

	11 月	12 月
無指定	64,122 円	276,054 円
タイ	0 円	5,300 円
カンボジア	30,700 円	214,400 円
ラオス	69,740 円	156,800 円
ベトナム	36,740 円	18,200 円
南アフリカ	11,500 円	106,600 円
パレスチナ	148,301 円	657,254 円
アフガニスタン	136,500 円	566,771 円
コリア	0 円	11,000 円
イラク	16,000 円	50,321 円
スーダン	0 円	19,300 円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

11 月計 **66,500 円 / 16 件**

12 月計 **282,556 円 / 33 件**

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からクレジットカードで
自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

11 月計 **1,803,850 円 / 1,518 件**

12 月計 **1,791,850 円 / 1,528 件**

編集後記

「イスラエルはやりすぎた」。年末年始に
起きたガザへの攻撃で、正月返上のスタッ
プ続出。日ごろのイスラエルによる占領へ
の憤りも、ここまでくると呆れと無力感
へ。しかし、年明けのピースパレード(1/
10 東京)では、普段で無沙汰している会員
さんに何人もお会いし、厳しい冷え込みを
感じないくらい元気をもらいました。事務
所にばかりいないで「書類を捨て、街に出
よう。会員に会おう」を実感です。(テ)

JVC 国際協力カレンダー 2009 『風のささやき』

22,200 部を販売、
1,850 万円の収益に。



JVC の活動を支えている事業の一つ「国際協力カレンダー」。
2009 年カレンダーは今年も 1,850 万円ほどの収益となりました。
ご利用くださった会員の皆様、ありがとうございました。2 年
目になった卓上カレンダーは 3,500 部ほど売れ、すっかり定着し
た感があります。

「写真がさわやか」「人と自然の調和に惹かれます」といった感想
もいただきました。ご協力いただいた写真家・白川由紀さんは、以
前からの JVC 支援者。「ご縁あってお手伝いさせて頂くことがで
き、本当にうれしかったです。これからも“それでも地球は素晴ら
しい”をテーマに、途上国が輝く一瞬に光を当てて仕事を続けてい
きたいと思います」とおっしゃっています。

2010 年カレンダーは、長倉洋海さんにご協力いただくことにな
りました。アフガニスタンはじめ世界の子どもたちの笑顔が毎月を
飾ります。暗い話題が続く昨今ですが、逆境にあっても未来への希
望を感じさせてくれる子どもたちの姿にどうぞご期待ください。

(カレンダー事務局 荻野 洋子)

NGO も信頼性が問われる時代に——

「アカウンタビリティ・セルフチェック 2008」マークを取得しました



Accountability
Self-Check 2008

これは、JANIC の「ア
カカウンタビリティ・セ
ルフチェック 2008」
マークです。JANIC
のアカカウンタビリ
ティ基準の 4 分野 (組
織運営・事業実施・会
計・情報公開) につ
いて当団体が適切に自
己審査したことを示
しています。

JVC は昨年 4 月、国際協力 NGO センター
(JANIC) が運営する「アカウンタビリティ・セルフ
チェック 2008」を実施しました。

これは、NGO 団体の運営がきちんとしているかど
うかを JANIC が設けた基準にもとづいて団体自身が
立会人とともにチェックするものです。JVC もこれ
を実施し、41 項目中 40 項目で OK という評価を得
ました。

もちろん、これをもって「JVC はアカウンタビリ
ティは完璧です」というわけではありませんが、こ
れまで長年にわたって地道に組織改善を続けてきた
ことが対外的にも認められた、と思えば嬉しいこと
です。JVC は今後も組織運営や事業活動の信頼性の
向上に努めていきます。

JANIC における「アカウンタビリティ」の定義：ある人ないし組
織の業績、応答性、さらには倫理性について、利害関係者が持つさ
まざまな期待に応えること。

会員専用ページパスワード (3~4 月) →→→

J98gbSfi62

※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&E のバックナンバーを順次公開
中です。現在、この作業を手伝って下さる方を募集中。細野までご連絡を！

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

86

Laos



交通安全のお守り

個人で自動車のレンタル業をしているラオス人から
レンタカーを借りた時にバンパーについていた。
どうやら交通安全を願ってのものらしい。
バナナの葉っぱでできている。
(サワナケート県にて)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数(2月1日現在) 合計 1,347人
(正会員 650人 賛助会員 697人)

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。
(無料。予約不要です)

第1月曜日 午後7:00 - 8:30

第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30

※会場はJVC東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。

